埼玉大学紀要　教育学部，　70(2)：37－61（2021）

日本の若者の道徳的認知の歪み
── 道徳的不活性化尺度の開発 ──

首藤　敏元　　埼玉大学教育学部
利根川智子　　東北福祉大学教育学部
樟本　千里　　岡山県立大学保健福祉学部

キーワード：認知の歪み、道徳的不活性化、若者、尺度開発

Ⅰ　問題と目的

道徳性（morality）は、「道徳的な行動とは人としてより善く生きようとする行為であり、そのような行為を生み出す社会的能力を道徳性と呼ぶ。」（首藤, 2013）と定義されるように、道徳発達研究は向社会的動機づけや愛他行動、社会的責任性や寛容さ、あるいは協調的な対人葛藤解決といった人としてより望ましい方向への発達に焦点を当ててきた。そのため、いじめ、攻撃行動や非行・犯罪行為は道徳性が未発達な姿として捉えられてきた。このような一次元的な見方に対して、Bandura（2016）は「道徳性を十分理解することは、人がどのように道徳的に行動するかを説明するだけでなく、人がどのようにして非人間的な行動をとり、それにもかかわらず自尊心を持ち続けるのかを説明しなければならない。」（p.1）と主張した。そして、彼の社会的認知理論（Bandura, 1986, 1989, 1992）に基づき、道徳的な行為は自己に内在化された道徳的基準、もしくは他者から与えられた社会的規制に自己を制御させる自己調整の過程の産物であると捉え、道徳的な判断や推論能力は行動のガイドラインを提供するものの、その認知は自己調整過程の影響を受けること、自己調整過程が個人特性や社会的文脈により活性化されることで道徳的行為が生じ、不活性化（disengagement [(1)]）されることで非道徳的行為が生じることを提唱した（Bandura, 1999, 2002, 2016）。この考え方に基づけば、同じ道徳的基準を所有している人であっても、自己調整過程が異なれば、異なるタイプの行動が生まれることになり、認知と行動との関係を広く説明することができる。さらに、自己調整過程に不活性化が生じたとしても、内在化された道徳的基準から逸脱することにはならないため、罪悪感は生じず、自尊心や道徳的なアイデンティティは守られる。

Bandura（1999, 2002, 2016）による自己調整過程における選択的な活性化と不活性化、および社会的行動との関係に関する考え方は道徳的不活性化（moral disengagement）モデルと呼ばれる。道徳的判断や行動場面では、「非難すべき行為」、「有害な結果」、「行為と結果の因果関係」、そして「被害者」という 4 種類の統制可能な認知の観点がある。それぞれの観点の認知に歪みが生じることで、道徳的基準が選択的に不活性化される。不活性化は 4 つの観点を上位カテゴリーとした 8 つの単位に分類されている（Figure 1）。すなわち「道徳的正当化」（例．友だちを守るためならば、かっとなって激しく怒っても問題はない）、「歪曲なラベル」（例．勝手に他人のバイクや車をもらっても、それはただ拝借しただけのことだ）、「都合のよい比較」（例．重大な犯罪と比べると、万引きはたいしたことではない）、「責任の転嫁」（例．友達の問題は、メ

ンバーの誰かが責任を負うべきだ）、「責任の拡散」（例．グループ全体の問題に少ししか加担していない個人を責めるのは不公平だ）、「結果の無視や矮小化」（例．軽いからかいやいたずらは誰も傷つけない）、「非難の帰属」（例．放置してある物は盗まれてもしかたないだろう）、「非人間化」（例．不愉快なヤツは人として扱われる必要はない）である（明田, 1992; Bandura, 1986, 2016; 吉澤, 2015）。Bandura, Barbaranelli, Caprara, & Pastorelli（1996）は 8 つの要素ごとに 4 つの項目を用意し、32 項目から成る一因子構造の不活性化尺度を開発した。この尺度は異なる地域のさまざまな年齢の青少年を対象にした多くの研究で用いられ、また多くの不活性化と関連した尺度を生み出した（吉澤, 2015）。例えば，Pelton, Ground, & Forehand（2004）は Bandura et al.（1996）の尺度がアフリカ系アメリカ人のシングル家庭の子どもにも妥当であることを検証し、ポジティブな子育てが不活性化の低さと関係し、その結果として非行防止につながる可能性を報告した。Pacielo, Fida, Tramontano, Lupinetti, & Caprara（2008）は 32 項目の道徳的不活性化尺度を使用して、14 歳から 20 歳の青年を縦断的に研究し、不活性化の高さが攻撃行動と破壊行動をもたらすことを示した。Traclet, Moret, Ohl, & Clémence（2015）はスポーツでの攻撃的行為に関する道徳的不活性化尺度を作成している。Thornberg & Jungert（2014）は道徳的不活性化がスウェーデンの小中学生のいじめと関連することを報告した。Thornberg, Wänström, & Pozzoli（2017）は，スウェーデンの小学校 15 校の 43 学級を対象に，学級内の道徳的不活性化傾向が学級内でのいじめと関係することを明らかにした。Kollerova, Soukup, & Gini（2018）は集団規範としての道徳的不活性化を捉える尺度を作成し、学級単位で、集合的不活性化といじめの加害・被害との関係を分析した。Campaert, Nocentini, & Menesini（2017）は、イタリアの青年を対象にして、いじめに関する道徳的不活性化尺度を作成し、いじめ加害と不活性化が有意に相関することを報告した。

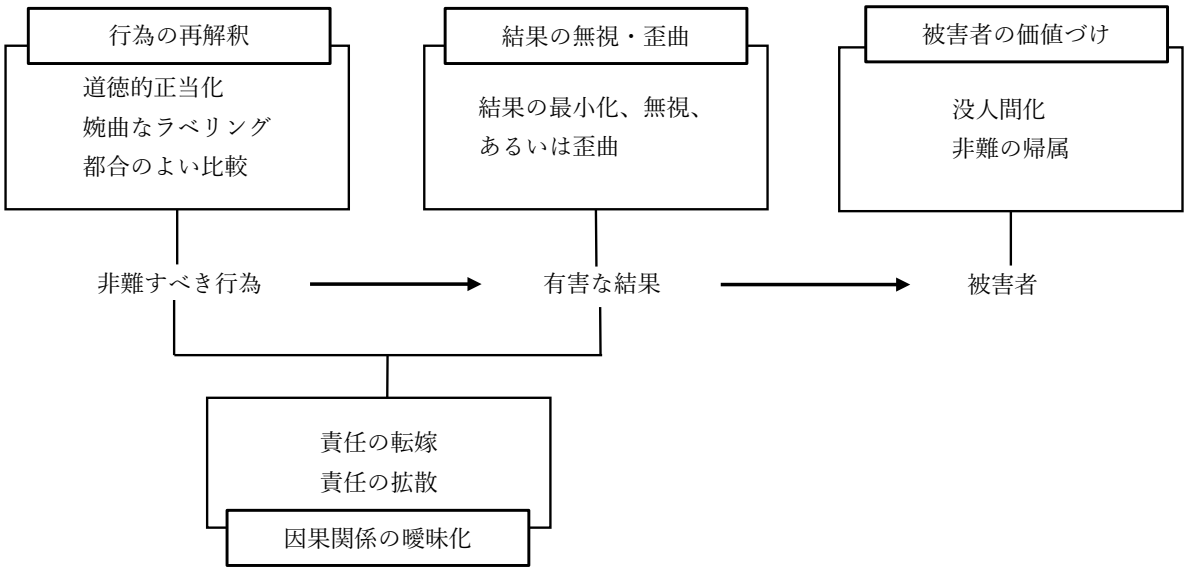

Figure 1　自己調整過程における道徳的不活性化のメカニズム（Bandura, 1986）

このように道徳的不活性化尺度を用いた研究により、不活性化は攻撃傾向を高め、反社会的行動をもたらしやすいことが実証されただけでない。Bandura は道徳的不活性化のメカニズムは、いじめ（bullying）やネットいじめ（cyberbullying）に代表される青年期の問題行動だけでなく、親の不適切なしつけ（例. 「体罰はしつけである」という歪んだ認知）、ヒーローアニメや物語（例. 「悪い人はこらしめてもよい」という歪んだ認知）、差別、企業犯罪、更に死刑や軍事力の行使を認める判断やその行為にも関係していると考えている。実際に、道徳的不活性化とテロリズムの支持・テロリストの虐待支持との関連（Jackson & Sparr, 2005）、不活性化と死刑容認との関連（Bandura, 2016）が検討されており、欧米社会を中心とした研究から、これらの仮説も概ね支持されている（Bandura, McAlister, & Owen, 2006; Bussey & Bandura, 1999; Gini,Pozzoli1, & Hymel, 2014; Killer, Bussey, Hawes, & Hunt, 2019）。

わが国での道徳的不活性化の実証的検討、そして非人間的行動や反社会的行動との関連については、大西（2015a, 215b, 2015c）と吉澤（2015）の実証的研究と研究展望があるものの、まだ緒に就いた段階である。この分野の研究を進めるためには、まず道徳的不活性化という認知傾向を測定できる尺度の開発が必要である。吉澤・吉田（2004）は、Bandura とは異なる観点から社会的逸脱行為をもたらす社会的認知を検討し、その研究の中で大学生を対象にした認知的歪曲尺度を作成している。西野・若本（2019）は、Bandura のモデルに基づき、日本の小中学生対象の道徳的不活性化尺度（10 項目 3 件法、一因子構造）を作成し、いじめ加害・傍観経験との関連を分析している。道徳的不活性化は「具体的な状況」の中で働く自己調整過程の「部分的・選択的」な不活性化であるため、欧米においては、研究テーマに即した認知の歪み傾向や不活性化傾向を捉える尺度が作成されてきた。しかし、わが国では研究数は少なく、尺度の検討も十分とはいえない。わが国においても、道徳的不活性化を青年期のいじめ、成人まで含めたネットいじめや犯罪、法・社会的規範からの逸脱行為、およびそれらの変容と関連させて研究する必要がある。更に、日本内外で共通する課題として、幼児期から児童期にかけての不活性化傾向の形成とその関連要因の分析である。これらの研究課題で用いられる尺度の条件は、「具体的な状況」として他者の被害を伴う行為場面であること、「部分的・選択的」な要素として Bandura による 4 つの自己調整過程と 8 つの不活性化を広く含むこと、そして児童期から成人期の広い年齢範囲をカバーすることが求められる。

そこで本研究は、日本の青年と成人を対象にできる道徳的不活性化尺度を作成することを目的とする。他者の被害を伴う行為としていじめに代表される対人的攻撃行動、物の破壊と社会的規範の逸脱行為を項目に含めることにする。その際、Bandura による 4 つの自己調整過程の不活性化と関連させ、多くの研究で一因子構造として利用されている不活性化尺度の因子構造を検討する。本研究は大学生を中心にし、大学生と同年齢の社会人、および高校生に調査を依頼する。将来的には研究対象を小学校高学年児童と中学生まで広げることを考慮し、項目内容は児童期後期の子どもにも理解できる表現を用いる。

Ⅱ　研究 1

1. 目的

将来的に青年期以降の若者と成人を対象とする道徳的不活性化尺度にむけて、大学生を対象に

した探索的な検討を行う。

2. 方法

(1) 参加者

埼玉県内の S 大学の学生 170 名と宮城県内の T 大学の学生 95 名、合計 265 名が調査に協力した。男性 85 名、女性 180 名、平均年齢 20.0 歳（範囲 18 歳～27 歳）であった。

Table 1　当初の道徳的不活性化尺度項目、およびその平均値と標準偏差　有効 N=261 （大学生）

変数名	定義	項目	*Mean*	*SD*	*Min*	*Max*
md1	歪曲なラベリング	子どもが人を叩いたり押したりするのは、ただの冗談に過ぎない	2.64	1.14	1.00	6.00
md2	歪曲なラベリング	子どものいじめは、子ども同士のじゃれ合いやふざけ合いの延長に過ぎない	2.12	1.10	1.00	5.00
md3	歪曲なラベリング	子どもの乱暴な言葉遣いは、遊びの一種に過ぎない	2.37	1.11	1.00	5.00
md4	道徳的正当化	人はいじめたり、いじめられたりしてこそ成長できる	1.71	0.96	1.00	5.00
md5	結果の無視・矮小化	誰にも害を与えないような小さなウソをつくことは問題ではない	3.59	1.28	1.00	6.00
md6	結果の無視・矮小化	子ども同士のいざこざ程度で子どもの心に傷ができることはない	1.56	0.77	1.00	5.00
md7	責任の転嫁	友だちが汚い言葉を使っていれば、子どもが汚い言葉を使うようになることは責められない	2.66	1.34	1.00	6.00
md8	責任の転嫁	仲間にそそのかされて間違った行動をしても責められない	2.08	1.03	1.00	6.00
md9	責任の拡散	仲間が犯した危害のほんの一部にしか関係していない子を責めることは公平ではない	2.67	1.17	1.00	6.00
md10	都合のよい比較	人を叩くことに比べれば、物を壊すことはたいしたことではない	2.28	1.22	1.00	6.00
md11	都合のよい比較	親の財布から内緒でお金を取ることは、コンビニで万引きすることに比べると、たいしたことではない	1.84	1.06	1.00	6.00
md12	道徳的正当化	友だちを守るためにケンカをすることは問題ない	3.56	1.07	1.00	6.00
md13	道徳的正当化	意地悪な子をこらしめるためなら、その子の持ち物を隠してもよい	1.61	0.87	1.00	6.00
md14	非難の帰属	不注意で物を置き忘れていたら、盗まれたとしてもその人の過ちである	3.02	1.35	1.00	6.00
md15	道徳的正当化	叩かれたら、叩き返さないと不公平だ	2.22	1.37	1.00	6.00
md16	非難の帰属	からかわれたり、いじめられたりする子は、その子自身にも問題がある	2.57	1.26	1.00	6.00
md17	非人間化	人にケガを負わせるようないじめをする子どもは、もはや人の心をもっているとはいえない	2.72	1.48	1.00	6.00

注) 評定は1.「まったく当てはまらない」、2.「当てはまらない」、3.「どちらかといえば当てはまらない」、4.「少し当てはまる」、5.「かなり当てはまる」、6.「とてもよく当てはまる」の6段階であった。

(2) 質問項目

Bandura et al（1996）による不活性化尺度の 32 項目と Thornberg & Jungert（2014）による尺度 17

項目に独自に作成した項目を追加し、著者による内容的妥当性に関して吟味した結果、最終的にTable 1 に示されている 17 項目を不活性化項目として採用した。自己調整過程の単位別に見ると、「歪曲なラベル」3 項目、「道徳的正当化」4 項目、「結果の無視・矮小化」2 項目、「責任の転嫁」2 項目、「責任の拡散」1 項目、「都合のよい比較」2 項目、「非難の帰属」2 項目、「非人間化」1 項目である。評定は 1.「まったく当てはまらない」、2.「当てはまらない」、3.「どちらかといえば当てはまらない」、4.「少し当てはまる」、5.「かなり当てはまる」、6.「とてもよく当てはまる」の 6 段階であった。

（3） 手続き

質問票は無記名であり、授業の中で配布され、実施後、回収された。回答時間は不活性化尺度以外の質問項目への回答時間を含めて約 5 分であった。回収率は 82.5％であった。

（4） 倫理的配慮

参加者には教示文の中で、回答は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、授業の成績・出席とは関係しないことが強調されていた。回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなした。

3. 結果と考察

17項目の平均値を見ると、最低が項目md6のM=1.56（SD=0.77）、最大が項目md5のM=3.59（SD=1.28）であり、全体的に今回のサンプルでは道徳的不活性化は低いことが分かる（Table 1）。

17項目の評定値に関して、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。複数の因子に.35以上の負荷量を示す項目とどの因子にも.35以上の負荷量をもたない項目を削除し、探索的に因子分析を繰り返した。ガットマン基準とスクリー基準に因子の解釈可能性を加えて検討した結果、Table 2に示されている12項目、2因子構造を採用することにした。累積寄与率は45.34%、適合度の指標は、χ^2（43）=206.31（p<.001）、CFI=.78、$RMSEA$=.12であった。

Table 2 当初の道徳的不活性化尺度の因子分析結果（N=261）

	Factor1	Factor2	共通性
因子1－判断と評価の歪み			
$Mean$=2.19, SD=0.74, α 係数=.76			
md11	**.74**	-.11	.51
md10	**.65**	-.17	.39
md8	**.61**	-.08	.35
md9	**.51**	.05	.28
md15	**.51**	.19	.36
md13	**.49**	.21	.35
md7	**.40**	.18	.24
因子2－考え方の歪み			
$Mean$=2.28, SD=0.75, α 係数=.71			
md2	-.09	**.73**	.50
md3	.08	**.64**	.45
md1	-.10	**.57**	.30
md4	.05	**.52**	.29
md16	.06	**.40**	.18
因子寄与	2.49	2.09	
因子間相関		.32	

因子ごとに.40以上の負荷量を示す項目の内容から、因子1は行為の判断と評価の歪みと関係していると考え、「判断と評価の歪み」因子と命名した。因子2はいじめや逸脱行為を道徳的な違反行為であるとは見なさない知識や信念の歪みを表していると考え、「考え方の歪み」因子と命名した。因子ごとに項目の平均値を計算し、それらを尺度得点とした。内的整合性の指標であるクロンバックのα係数は尺度1で.76、尺度2では.71であった。

研究1の尺度では自己調整過程に対応した不活性化項目を用意したものの、因子分析の結果、その過程に対応する因子は抽出されることはなかった。道徳的不活性化は具体的な状況の中で働く認知であるが、質問項目の評定を通して捉えられるのは状況的な認知の働きではなく、人の認知傾向であると考えられる。歪んだ認知をもちやすい傾向として、研究1では「判断・評価の歪み」と「考え方の歪み」の2種類であったと考えられる。

しかしながら、因子構造の適合度の指標は低い。今後、サンプル数を増やしたり、参加者の年齢の幅を広げたりすることで、不活性化傾向の構造を丁寧に分析し、適合度の高い尺度を作成する必要がある。

Ⅲ　研究２

1. 目的

欧米社会の研究をメタ分析した論文によると、道徳的不活性化は児童期と青年期の子どものいじめ（Killer, Bussey, Hawes, & Hunt, 2019）と思春期以降の子どもと若者の攻撃的行動（Gini, Pozzoli, & Hymel, 2014）の生起に有意に介在していることが明らかになっている。これらの研究は小中学生と高校生、および 20 歳前後までの成人を対象にすることが圧倒的に多い。研究 1 では大学生のみを対象にしたが、研究 2 では対象を高校生、および大学生と同年齢の社会人にまで広げ、日本の若者における道徳的不活性化傾向を捉える尺度を作成する。その際、因子的妥当性だけでなく、再テスト法による信頼性と構成概念妥当性について検討を加える。小学校高学年児童と中学生を対象にした研究では、いじめや非行との関連を見ることで、尺度の基準関連妥当性を検討してきたといえる。研究２は高校生から 20 歳前半の若者を対象とするため、いじめの加害・傍観の質問を用意した場合、多くの参加者は過去の経験を思い出して回答することになる。そのため、現在の行動を基準とする基準関連妥当性の検討はできない。また、犯罪経験については倫理上質問することはできない。そこで、研究 2 では道徳性と関連する尺度との関連を検討することにより、道徳的不活性化の特徴を描き出し、尺度の構成概念妥当性の検討につなげる。

道徳的不活性化は他者に被害のある状況での社会的認知の歪みである。人は、対等な他者との議論や協同作業を通して、自己の考え方を知り、それを評価、調整し、変容させようとする（Yeates & Selman, 1989）。つまり、視点取得と批判的思考の経験により、社会的に適応的な認知が形成され、歪んだ認知が変容されることが予想できる。平山・楠見（2004）は，自分の推論過程を意識的に吟味する反省的に思考する態度を批判的思考態度と定義し、大学生を対象にした測定尺度を作成した。道徳的不活性化傾向は批判的思考態度とマイナスに相関することが予想できる。登張・首藤・大山・名尾（2019）は協調性を再定義し、自己抑制的な同調性や相互協調性に限定されてきた概念を、視点の異なる他者との協同的で問題解決的な協調（Yeates & Selman, 1989）まで広げ、高校生と大学生を対象にした多面的協調性尺度を作成した。道徳的不活性化は問題解決型の協調性とはマイナスに相関することが予想できる。

人は事件の加害者に対して、その罪を批判したり人格を非難したりするだけでなく、何の罪もない被害者に対しても行動を批判したり、人格を暗に卑下したりする傾向がある。この傾向は公正世界信念（Belief in Just World）のテーマの下で研究が進められている。公正世界信念とは、世界は突然の不運に見舞われることのない公正で安全な場所であり、人はその人にふさわしいものを手にしているとする信念（Lerner, 1980）である。加害者に厳罰を与える判断をしたり、加害者を非人間化したりする傾向にその信念は関係している（村山・三浦, 2015）。道徳的不活性化は道徳的な意思決定から撤退することであるため、公正さという道徳観をたとえ科学的な因果関係がなくても持ち続ける推論（e.g. いつか必ず報いが下る）とは無関係かマイナスの関係があると予想できる。研究 2 では村山・三浦（2015）の公正世界信念尺度を用いてこの仮説を検証する。

道徳的不活性化は自己調整過程という意思決定における状況的な認知の歪みであるが、尺度として測定されるものは、状況の個別性を越えた特性としての認知の歪み傾向である。反道徳的、もしくは非人間的なパーソナリティ要因として、マキャベリアニズム，自己愛傾向，サイコパシー傾向がある。最近は、この 3 つの特性は相互に相関し、いずれも他者に嫌悪感や苦痛を与える行動傾向を特徴にするものとして，Dark Triad と総称されている（Paulhus & Williams, 2002）。研究 2 では、田村・小塩・田中・増井・ジョナソン（2015）の作成した Dark Triad Dirty Dozen（DTDD-J）尺度を用いる。道徳的不活性化傾向は、道徳的な概念を保ちながら、罪悪感なしに人を操作したり、非人間的な行動をしたりすることと関係するため、Dark Triad の中でも罪悪感や共感性に乏しく，利己的かつ反社会的な行動をする傾向性を特徴とするサイコパシー傾向とプラスに相関することが予想できる。

2. 方法

(1) 参加者

高校生 200 名、社会人 200 名、そして大学生 421 名の合計 821 名が調査に協力した。大学生は研究 1 とは異なるサンプルである。関東地区の S 大学から多く参加していたものの、所属学部は 6 学部に分かれており、学生の専攻の偏りは少ない。高校生と社会人の参加者は、オンライン調査会社の（株）クロスマーケッティングの契約会員の中から、調査会社の呼びかけに自発的に応じた者である。参加者のプロフィールは Table 3 に示したとおりである。高校生と社会人の居住地域はすべての都道府県にまたがっていた。高校生は 15 歳以上で高等専修学校在籍者を含んでいた。社会人は 18 歳以上 22 歳以下であり、全員が大学教育の経験はなかった。

(2) 質問項目

① *道徳的不活性化*　研究 1 で作成された 12 項目（6 件法）から成る尺度が用いられた。

② *批判的思考態度*　平山・楠見（2004）が大学生を対象に開発した批判的思考態度尺度が用いられた。この尺度は 17 項目（5 件法）から成り、「論理的思考への自覚」、「探究心」、「客観性」、「証拠の重視」の 4 因子から構成される。本研究での確証的因子分析の結果、「証拠の重視」因子の項目の負荷量が小さく、α係数も低いことから、最初の 3 つの因子だけで再度確証的因子分析を行った。その結果、因子構造の適合度は高く（*GFI*=.93, *CFI*=.96, *RMSEA*=.07, *SRMR*=.04）、尺度のα係数も高い（論理的思考への自覚 α=.81、探求心 α=.81、客観性 α=.80）ことから、3 つの下位尺度の得点（項目の平均値）を用いることにした。

③ *多面的協調性*　登張ら（2019）は高校生と大学生を対象に 13 項目（5 件法）、3 因子から成る多面的協調性尺度を開発した。本研究での確証的因子分析の結果、適合度は高く（*GFI*=.92, *CFI*=.92, *RMSEA*=.09, *SRMR*=.06）、尺度の内的整合性も高い（協調的問題解決 α=.83、協力指向 α=.78、調和指向 α=.87）ことから、彼らの尺度をそのまま用いることにした。尺度得点は各因子に高く負荷する項目の平均値である。

Table 3　研究参加者の特徴

	高校生		大学生		社会人	
	N=200		*N*=421		*N*=200	
（職業）					フルタイム	131
					パート	69
（大学）			S大学	381		
			T大学	26		
			O大学	14		
（学部）			教養	93		
			経済	53		
			教育	112		
			工学	71		
			理学	58		
			福祉	14		
			未記入	20		
性別	男性	100	男性	191	男性	100
	女性	100	女性	219	女性	100
	その他	0	その他	2	その他	0
	未記入	0	未記入	9	未記入	0
平均年齢	16.9		19.47		22.01	
	(0.76)		(1.19)		(1.25)	
回答方法	web回答 [a)]		質問紙+web回答 [b)]		web回答 [a)]	
サンプリング	web調査 [a)]		大学授業		web調査 [a)]	

[a)] (株)クロス・マーケッティング
[b)] Google Formを使用

④ *公正世界信念*　村山・三浦（2015）は成人を対象に 12 項目（6 件法）から成る公正世界信念尺度を開発した。この尺度は「究極的公正世界信念」（e.g. ひどく苦しんだ者はいつか報われる）、「内在的公正世界信念」（e.g. 悪事を働くすべての者はやがてその責任を負うことになる）、および「不公正世界信念」（e.g. 世の中のたいていのことは不公平だ）の 3 因子から成る。本研究での確証的因子分析の結果、適合度は高く（*GFI*=.92, *CFI*=.96, *RMSEA*=.07, *SRMR*=.05）、各尺度の内的整合性も高い（究極的 α=.91、内在的 α=.84、不公正 α=.78）。研究 2 では、この尺度をそのまま用い、各因子に高く負荷する項目の平均値を尺度得点として得点化した。

⑤ *Dark Triad Dirty Dozen*　田村ら（2015）の作成した日本語版 Dark Triad Dirty Dozen（DTDD-J）を用いた。この尺度は大学生を対象に標準化された Dark Triad 尺度の短縮版であり、9 項目（5 件法）、3 因子（マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向）から構成されている。本研究での確証的因子分析の結果、適合度はさほど高くはなく（*GFI*=.89, *CFI*=.83, *RMSEA*=.09, *SRMR*=.09）、内的整合性が十分でない尺度（マキャベリアニズム α=.75、サイコパシー傾向 α=.45、自己愛傾向 α=.72）もあった。しかしながら、各因子の測定内容は明確であり、因子の解釈も変えようがないため、オリジナルな尺度のまま用いることにした。尺度得点は各因子に高く負荷する項目の平均値である。

（3） 手続き

大学生の場合、質問票は授業の中で配布され、授業後の空き時間に実施後、回収された。また遠隔授業が続いていたため、質問票と同じものをGoogle Form上に作成し、オンラインでも回答できるようにした。回答時間は約15分であり、質問票とGoogle Formを合わせた回収率は85.7%であった。高校生と社会人はオンライン調査会社の（株）クロスマーケッティングを通して、そこの契約会員がリクルートさそれ、調査会社が大学生と同じ質問票をオンライン回答用にレイアウトし、実施した。

（4） 倫理的配慮

無記名式の調査であった。参加者には教示文の中で、回答は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、大学生の場合は授業の成績・出席とは関係しないことが強調されていた。回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなした。高校生と社会人の場合は、調査会社のリクルートに自発的に応じた参加者であるため、回答の任意性はクリアしていると判断した。

3. 結果と考察

（1） 不活性化尺度の作成

12 項目の評定値が研究 1 で得られた 2 因子構造をもつと仮定して確証的因子分析を行ったものの、その適合度は低かった。そこで、再度探索的因子分析を行い、どの因子にも.35 を越える負荷量を示さない項目と複数の因子に.35 を超える負荷量を示した項目を削除し、9 項目での探索的因子分析を行った。ガットマン基準とスクリー基準に因子の解釈可能性を加えて検討した結果、Table 4 に示されている 3 因子構造の適合度がよかった。累積寄与率は 65.01%、適合度の指標として χ^2（12）=56.81（p<.001）、*CFI*=.98、*RMSEA*=.06 であった。

Table 4 に示されているように、因子 1 には Bandura の定義による「結果の無視・矮小化」にあたる「子ども同士のいざこざ程度で子どもの心に傷ができることはない」、「道徳的正当化」にあたる「人はいじめたり、いじめられたりしてこそ成長できる」と「意地悪な子をこらしめるためなら、その子の持ち物を隠してもよい」の負荷量が高い。これらはいじめの他者被害性を無視するだけでなく、いじめが「人の成長の糧となる」、つまりいじめの悪の要素を道徳的に正当化する推論を表していると考えられる。そのため、逸脱行為を正当化する推論の傾向だと捉え、「正当化の歪み」と命名した。因子 2 に高く負荷する 3 項目はいずれも「歪曲なラベリング」にあたり、いじめ行為の解釈を変えることで、道徳的概念を守ろうとする判断の仕方を表していると考えられる。そこで、因子 2 を「解釈の歪み」と命名した。因子 3 には「責任の転嫁」、「責任の拡散」と「都合のよい比較」に含まれる項目の負荷量が高い。これらは行為の評価の際に働く認知の歪みであることから、「評価の歪み」と命名した。

高校生、大学生、および社会人ごとに、上記の 3 因子構造として確証的因子分析を行った結果が Table 5 に示されている。いずれの分析においても高い適合度が得られた。各因子に高く負荷する 3 項目の評定値の平均値を尺度得点とした。内的整合性の指標であるクロンバックのα係数を求めたところ、全体では「正当化の歪み」が.75、「解釈の歪み」が.75、「評価の歪み」が.64 となった。Table 5 にあるように、グループ別のα係数も研究レベルで使用する値としては十分な高さを示した。しかし、「評価の歪み」のα係数は低く、これは今後の検討課題である。

Table 4　道徳的不活性化尺度の因子分析結果　　有効 *N*=807

変数	項目	*Mean*	*SD*	F1	F2	F3	共通性
因子１－正当化の歪み、*M*=1.97、*SD*=0.99、α係数=.77							
md6	子ども同士のいざこざ程度で子どもの心に傷ができることはない	1.78	1.09	**.70**	.03	.08	.60
md4	人はいじめたり，いじめられたりしてこそ成長できる	2.09	1.25	**.70**	.00	.02	.51
md13	意地悪な子をこらしめるためなら，その子の持ち物を隠してもよい	2.05	1.24	**.61**	-.04	.19	.50
因子２－解釈の歪み、*M*=2.51、*SD*=1.04、α係数=.80							
md3	子どもの乱暴な言葉遣いは，遊びの一種に過ぎない	2.56	1.28	-.20	**.74**	.28	.67
md2	子どものいじめは，子ども同士のじゃれ合いやふざけ合いの延長に過ぎない	2.19	1.23	.33	**.70**	-.19	.69
md1	子どもが人を叩いたり押したりするのは，ただの冗談に過ぎない	2.77	1.24	.01	**.64**	-.01	.41
因子３－評価の歪み、*M*=2.54、*SD*=1.00、α係数=.68							
md7	友だちが汚い言葉を使っていれば，子どもが汚い言葉を使うようになることは責められない	2.51	1.34	.02	.02	**.70**	.53
md9	仲間が犯した危害のほんの一部にしか関係していない子を責めることは公平ではない	2.65	1.22	.23	-.04	**.51**	.41
md10	人を叩くことに比べれば，物を壊すことはたいしたことではない	2.47	1.31	.18	.09	**.36**	.31
		因子寄与		3.02	2.85	2.59	
		因子間相関			F1	F2	F3
				F1		.62	.60
				F2			.59
削除した項目							
md5	誰にも害を与えないような小さなウソをつくことは問題ではない	3.59	1.43				
md15	叩かれたら，叩き返さないと不公平だ	2.70	1.48				
md17	人にケガを負わせるようないじめをする子どもは，もはや人の心をもっているとはいえない	3.16	1.48				

注）評定は1.「まったく当てはまらない」、2.「当てはまらない」、3.「どちらかといえば当てはまらない」、4.「少し当てはまる」、5.「かなり当てはまる」、6.「とてもよく当てはまる」の6段階であった。

Table 5　確証的因子分析での妥当性指標と尺度のα係数

	全体 [a)] *N*=807	高校生 *N*=200	大学生 *N*=407	社会人 *N*=200
CFI	.98	.98	.90	.97
RMSEA	.07	.05	.10	.07
SRMR	.04	.04	.05	.04
GFI	.97	.96	.94	.95
AGFI	.94	.93	.88	.90
		α 係数		
Factor1	.75	.75	.73	.75
Factor2	.78	.76	.70	.85
Factor3	.64	.67	.58	.76

[a)] 探索的因子分析

（2）　信頼性の検討

再テスト法による尺度の信頼性を検討するために、大学生 91 名に、3 ヶ月後、同一の不活性化尺度に回答してもらった。Table 6 に示されているとおり、各尺度の 2 時点間の相関係数は.37～.49 であり、中程度に有意な関係を示した。この結果は尺度の安定性を示す証拠といえる。3 ヶ月の間に教育実習とその事後指導の授業があり、大学生は対人的で協同的な教育・保育と援助体験、および仲間との振り返りの機会を経験していた。2 回目の方がどの尺度においても不活性化傾向が低下しているのはそのような経験が関係していると考えられる。

Table 6　再テスト法による相関係数　　大学生 *N*=91

		1回目 正当化の歪み	1回目 解釈の歪み	1回目 評価の歪み	*M*	*SD*
2回目	正当化の歪み	**.47** **	.24 *	.38 **	1.40	1.33
	解釈の歪み	.21 *	**.37** **	.04	2.12	2.00
	評価の歪み	.23 *	.22 *	**.49** **	2.00	2.00
	M	1.56	2.29	2.52		
	SD	1.33	2.33	2.67		

（3）　尺度得点の特徴

各尺度得点について、3（グループ）×2（性）の ANOVA を実施した。高校生、大学生と社会人をグループとしたのは以下の理由からである。まず、大学生と高校生および社会人はサンプリングが異なることである。高校生と社会人は調査会社のリクルートによって、大学生は授業の中でそれぞれ自発的に回答に応じた参加者である。このサンプリングの差違が調査結果に反映する可能性もあるため、大学生と社会人を区別する必要があった。次に、大学生と社会人は年齢では重なっているものの、教育経験が異なっている。Bandura（2016）によると、道徳的不活性化と教育経験とは有意な関係がある。そのため、年齢でまとめることはできないと考えた。

Table 7　道徳的不活性化尺度の平均値[a)]と標準偏差、および ANOVA の結果

		正当化の歪み			解釈の歪み			評価の歪み		
		N	*Mean*	*SD*	*N*	*Mean*	*SD*	*N*	*Mean*	*SD*
高校生	男性	100	2.29	1.11	100	2.73	1.09	100	2.52	0.92
M age=16;10	女性	100	1.77	0.78	100	2.43	0.98	100	2.37	0.87
大学生	男性	188	2.05	1.02	189	2.86	1.04	188	2.92	0.99
M age=19;6	女性	219	1.53	0.58	219	2.27	0.82	219	2.42	0.90
社会人	男性	100	2.17	1.11	100	2.37	1.04	100	2.39	1.07
M age=22;0	女性	100	2.03	0.92	100	2.29	1.01	100	2.46	1.08
グループ(A)		$F(2, 804)=9.61$, 偏$\eta^2=.02$, $p<.001$			$F(2, 802)=4.67$, 偏$\eta^2=.01$, $p<.01$			$F(2, 801)=6.00$, 偏$\eta^2=.02$, $p<.01$		
性(B)		$F(1, 804)=34.37$, 偏$\eta^2=.04$, $p<.001$			$F(1, 802)=19.75$, 偏$\eta^2=.02$, $p<.001$			$F(1, 801)=7.40$, 偏$\eta^2=.01$, $p<.01$		
A×B		$F(2, 804)=3.37$, 偏$\eta^2=.01$, $p<.05$			$F(2, 802)=4.80$, 偏$\eta^2=.01$, $p<.01$			$F(2, 801)=6.03$, 偏$\eta^2=.02$, $p<.01$		

[a)]1「まったく当てはまらない」～6「よく当てはまる」の 6 段階評定、得点が高いほど歪みも大きい。

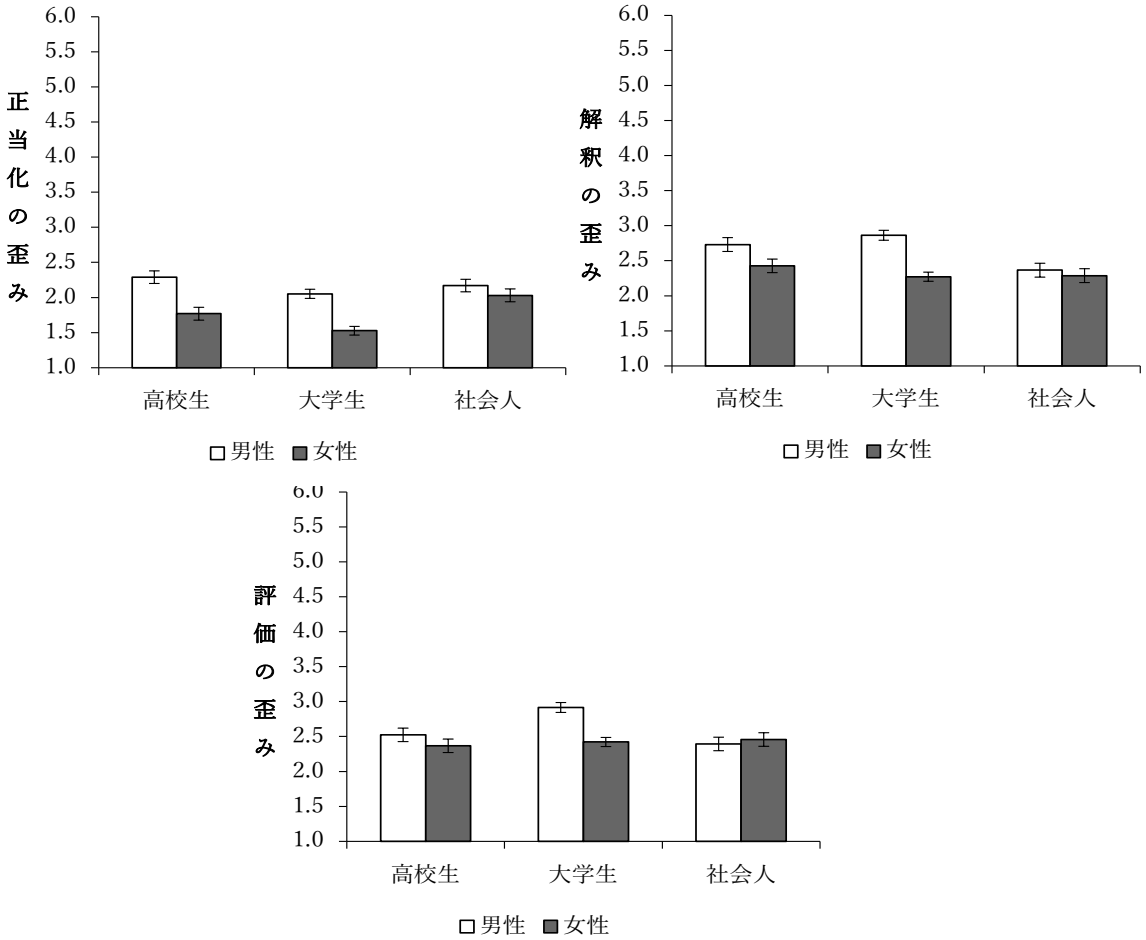

Figure 2　道徳的不活性化の下位尺度の平均値（エラーバーは標準誤差）

① *正当化の歪み*　Table 7 と Figure 2 に示されているとおり、全体としての平均値は低い。グループと性の主効果、および両者の交互作用効果が有意であった。多重比較の結果、社会人（*M*=2.10,

SE=0.06, 95%*CI*: 1.97-2.23）≒高校生（*M*=2.03, *SE*=0.06, 95%*CI*: 1.90-2.16）＞大学生（*M*=1.79, *SE*=0.05, 95%*CI*: 1.70-1.88）、男性（*M*=2.17, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.08-2.27）＞女性（*M*=1.78, *SE*=0.05, 95%*CI*: 1.68-1.90）であり、グループごとの性の単純主効果を検定したところ、性差は高校生と大学生で有意であった。

② *解釈の歪み*　解釈の歪み得点も全体での平均値が 2 点台であり、低いといえる。主効果と交互作用効果のすべてが有意であった。高校生（*M*=2.58, *SE*=0.07, 95%*CI*: 2.44-2.71）≒大学生（*M*=2.57, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.47-2.66）＞社会人（*M*=2.33, *SE*=0.07, 95%*CI*: 2.20-2.46）、男性（*M*=2.65, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.25-2.78）＞女性（*M*=2.33, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.23-2.43）となり、グループごとの性の単純主効果を分析したところ、有意な性差は高校生と大学生で認められた。

③ *評価の歪み*　評価の歪み傾向も全体的に低い。主効果と交互作用効果のすべてが有意であり、大学生（*M*=2.67, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.58-2.76）＞高校生（*M*=2.45, *SE*=0.07, 95%*CI*: 2.31-2.58）≒社会人（*M*=2.43, *SE*=0.07, 95%*CI*: 2.29-2.56）、男性（*M*=2.61, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.51-2.71）＞女性（*M*=2.42, *SE*=0.05, 95%*CI*: 2.32-2.52）であった。性の単純主効果を分析したところ、有意な性差は大学生のみで認められた。

Table 8　妥当性検討のために用いた尺度の平均値

サンプル 1（大学生）[a]	*N*	*Mean*	*SD*	*Min*	*Max*
道徳的不活性化尺度[b]					
正当化の歪み	170	1.67	0.64	1.00	3.67
解釈の歪み	170	2.44	0.91	1.00	4.33
評価の歪み	170	2.54	0.94	1.00	6.00
歪み全体	170	2.22	0.60	1.00	3.56
DarkTriad尺度[c]					
マキャベリラリズ	165	170	2.42	0.86	1.00
サイコパス	165	170	2.50	0.70	1.00
ナルシシズム	165	170	2.95	0.84	1.00
DarkTriad全体	165	170	2.62	0.56	1.25
公正世界信念尺度[b]					
究極的公正世界観	169	3.10	1.21	1.00	5.75
内在的公正世界観	169	4.00	1.06	1.00	6.00
非公正世界観	169	4.18	1.02	1.50	6.00
サンプル 2（高校生、大学生、社会人）[a]					
	N	*Mean*	*SD*	*Min*	*Max*
道徳的不活性化尺度[b]					
正当化の歪み	647	1.98	1.00	1.00	6.00
解釈の歪み	645	2.51	1.04	1.00	6.00
評価の歪み	644	2.54	1.00	1.00	6.00
歪み全体	642	2.34	0.84	1.00	6.00
多面的協調性尺度[c]					
協調的問題解決指向	649	3.68	0.77	1.00	5.00
協力指向	648	3.37	0.97	1.00	5.00
調和指向	648	3.52	0.93	1.00	5.00
批判的思考態度尺度[c]					
論理的思考の自覚	649	3.01	0.90	1.00	5.00
探究心	649	3.51	0.90	1.00	5.00
客観性	649	3.49	0.82	1.00	5.00

[a] サンプル 1 とサンプル 2 の参加者の重なりはない。
[b] 6段階評定
[c] 5段階評定

（4） 妥当性の検討

大学生の参加者は 2 つのサンプルから成り、それぞれで道徳的不活性化尺度以外に用いられた尺度は異なるため、サンプルごとに不活性化尺度との関連を分析した。サンプル 1 は大学生のみの参加者（全体 *N*=170）で Dark Triad 尺度と公正世界信念尺度が用いられた。サンプル 2 は高校生、大学生及び社会人のサンプル（全体 *N*=651）であり、多面的協調性尺度と批判的思考態度尺度が用いられた。サンプルごとの尺度の平均値と標準偏差は Table 8 にまとめられている。

年齢と性の影響を統制した尺度間の相関係数は Table 9 にまとめられている。道徳的不活性化尺度は一因子構造として得点化されることも多く、研究 2 においても因子間の相関は高かったため、3 つの下位尺度得点に加えて、歪み全体得点も計算した。Dark Triad 尺度との関連を見ると、道徳観の欠如を特徴とするサイコパシー傾向と「正当化の歪み」の間に低いながらも有意なプラスの相関が認められた。これは仮説と一致した結果である。マキャベアニズムと責任の拡散と転嫁を特徴とする「評価の歪み」の間には弱いながらもマイナスの有意な相関が認められた。マキャベアニズムは冷笑的に世界を捉えて他者操作的に行動する傾向性を表するため、「評価の歪み」とはプラスの関係があるとも考えられる。マキャベアニズムでは道徳観は喪失していないため、他者被害の結果の責任を客観的に捉えることで、世間一般の道徳観から外れることによる快感情（シャーデンフロイデ）を得ていると考えられる（稲垣, 2019）。

公正世界信念尺度との関係では、内在的公正世界観と不活性化の下位尺度との間に弱いながらも一貫したマイナスの相関が認められた。内在的正義は「悪事には必ず罰が下る」という強い道徳観と関連した観念であり、不活性化のすべての側面と全体でマイナスの関連が認められたことは仮説と一致している。また、「世の中に公平はない」と考える非公正世界観と「解釈の歪み」の間にはプラスの有意な相関があった。公正世界を認めない傾向は、他者被害という結果の解釈を歪めることで、他者の道徳的逸脱から生じる自己の道徳的非難感や怒り、自己の逸脱から生じる罪悪感から自己を遠ざける傾向と関係するのかもしれない。

多面的協調性尺度との関連を見ると、本研究の仮説と一致し、協調的問題解決指向と「正当化の歪み」、「評価の歪み」、および歪み全体傾向との間に弱いながらも有意なマイナスの相関が認められた。調和指向と「正当化の歪み」との間にも弱い有意なマイナス相関が認められた。協調的問題解決指向は活動的で創造的な協同性を指向する傾向（登張ら, 2019）であるため、不活性化傾向が他者の立場を尊重し、結果を誠実に認める協調性とはマイナスに関係するという結果には納得できる。相手に合わせようとする自己抑制的な調和指向は道徳観を共有できる他者への従順さを表していると考えられるため、「正当化の歪み」とはマイナスに関係するのかもしれない。

人は批判的思考態度をとることにより、自分の信念と矛盾する証拠を低く評価するというバイアスを回避することができる（平山・楠見, 2004）ため、批判的思考態度と道徳的不活性化の間にはマイナスの関係があると予想された。Table 9 にあるとおり、批判的思考態度の探究心と客観性は不活性化の「正当化の歪み」と弱いながらも有意にマイナス相関を示しており、本研究の仮説と一致した結果が示された。正当化の歪みの傾向は物事の有様を客観的に内省し、真実を探求することから遠ざかる傾向と関係していると考えられる。興味深いことに、論理的思考の自覚は「解釈の歪み」と歪み全体傾向とプラスに相関していた。論理的思考の自覚に乏しい人は、他者被害を歪める解釈をしたり、責任転嫁と拡散の評価をしたりすることが非論理的であることに気づいておらず、自分なりの筋の通った思考であると考えているのかもしれない。

Table 9　道徳的不活性化尺度との相関係数 [a)]

	道徳的不活性化尺度			
	正当化の歪み	解釈の歪み	評価の歪み	歪み全体
DarkTriad尺度				
マキャベリアニズム	.08	.07	**-.15** *	-.02
サイコパシー傾向	**.18** *	.05	-.10	.04
自己愛傾向	-.08	-.02	-.04	-.06
DarkTriad全体	.08	.05	-.14 +	-.02
公正世界信念尺度				
究極的公正世界観	.08	**-.16** *	-.02	-.07
内在的公正世界観	**-.15** *	**-.16** *	-.14 +	**-.21** **
非公正世界観	.00	**.24** **	.01	.12
多面的協調性尺度				
協調的問題解決指向	**-.27** **	-.06	**-.09** *	**-.17** **
協力指向	-.04	.05	.02	.02
調和指向	**-.13** **	-.03	.03	-.05
批判的思考態度尺度				
論理的思考の自覚	.06	**.12** **	.09 *	**.11** **
探究心	**-.16** **	-.03	-.01	-.08 +
客観性	**-.12** **	-.04	-.02	-.07 +

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

a) 年齢と性を統制した偏相関係数

Ⅳ　総合的考察

1. 道徳的不活性化傾向

(1) 道徳的不活性化尺度の特徴

道徳的不活性化は道徳的な判断と行動が求められる状況下で働く自己調整過程の歪みから生じる。この不活性化の基本的な仮定（Bandura, 1999, 2002, 2016）に基づく研究は、いじめ等の具体的な状況を扱う必要がある。しかし、Bandura（1986, 1989, 1992）の社会的認知理論における個人－行動－環境の相互決定主義のモデルに示唆されているように、不活性化は状況の影響だけでなく個人の社会的認知の歪み傾向というパーソナリティ要因の影響も受けることが考えられる。そのため今までに多くの不活性化尺度が作成され、さまざまな行動特性との関連性が検討されてきた（Bandura, 2016）。道徳的不活性化は児童、青年、そして成人の社会的逸脱行為、親や教師の体罰、銃所有制度、死刑制度、テロリズム、そして報復のための戦争など、世の中の至る所に存在し、私たちはそれらの判断や行動を求められている（Bandura, 2016）。道徳的不活性化傾向という個人の特性を測定する尺度の存在意義もここにある。

研究 1 では Bandura ら（1996）と Thornberg & Jungert（2014）の尺度項目に独自の項目を追加して、大学生の道徳的不活性化傾向を捉える尺度作成を試みた。その結果 2 因子から成る尺度が作成できたものの、その適合度は満足いくものではなかった。研究 2 では対象を高校生、大学生、

大学生と同年齢の社会人にまで広げ、尺度構成を行った。その結果、道徳的不活性化は「正当化の歪み」、「解釈の歪み」、および「評価の歪み」という 3 因子から構成されることが分かった。因子構造の適合度は十分高く、3 つの尺度の内的整合性も満足いくものであった。また、再テスト法による信頼性も確認された。

研究 1 と研究 2 とも、自己調整の過程に沿った因子は抽出されなかった。Figure 1 の「被害者」に焦点づけた「没人間化」と「非難の帰属」にあたる項目は、項目分析の段階で尺度から除かれることになった。身近な人との結合性が強いと外集団への非人間化という歪んだ認知をもたらすことを示唆する研究（Waytz & Epley, 2012）やビデオゲームの遊戯において戦闘相手を非人間的にラベリングすることにより攻撃行動が高まることを示す研究（田村・大渕, 2006）があるように、被害者の非人間化や卑下という認知の歪みは攻撃性にとって重要な要因となる。「被害者」の非人間化を含めた尺度の再開発が必要になるかもしれない。また、高校生と大学生の「評価の歪み」尺度の α 係数がやや低く、今後の研究でのこの下位尺度の解釈には慎重でなければならないだろう。

(2) 道徳的不活性化傾向の特徴

本研究の参加者の不活性化傾向は全体的に低く、歪んだ考え方には平均して「反対」の立場を示していた。また、3 種類の歪み得点はすべて男性の方が有意に高く、この性差は高校生と大学生で明確であり、社会人では性差はほとんど認められなかった。さらに、不活性化傾向は相対的に社会人が 1 番低い結果となった。これらの結果が学生という身分から生じているのか、年齢や社会的経験から来るものなのかは不明である。研究 2 では主にサンプリングの問題から年齢ごとにグループ分けをすることはできなかった。今後は年齢要因と社会的経験要因を区別し、両者の不活性化との関連性を分析する必要がある。本研究の調査教示文には、不活性化の質問項目が「小学生から中学生の子どものいじめや逸脱行為についての意見」として提示されていた。したがって、本研究で捉えたものは全般的な道徳的不活性化傾向というよりは、小中学生のいじめに関する認知の歪み傾向であると考えることができる。高校生と大学生の性差や社会人と比較した場合の得点の高さは生徒・学生という立場と関係しているのかもしれない。

2. 道徳的不活性化尺度の妥当性

(1) 構成概念妥当性

平山・楠見（2004）は自分の信念と矛盾する証拠を低く評価するというバイアスを、意図レベルでの問題とされる批判的思考態度によって回避することが可能になること、またその態度はさまざまな情報や幅広い知識を希求する「探究心」という態度であるということを明らかにした。道徳的不活性化尺度の「正当化の歪み」はこの「探究心」とマイナスに相関していた。この結果は、批判的思考態度は道徳意識を高めるという知見（溝川・子安, 2020）とも一致している。登張ら（2019）の作成した多面的協調性尺度協調性との関係では、道徳的不活性化の「正当化の歪み」は他者との協同的で創造的な問題解決的な協調指向の側面とマイナスに関連することが見出された。協調性と近い概念である共感性と道徳的不活性化傾向との関係を検討した研究によると、不活性化傾向は視点取得や共感とマイナスに関係していることが見出されている。さらに、児童と青年の共感性と攻撃行動との関係を不活性化傾向が媒介、もしくは調整することも示されている（Bussey, Quinn, & Dobson, 2015; Detert, 2008; Visconti, Ladd, & Kochenderfer-Ladd, 2015）。わが国

においても道徳的不活性化傾向と共感性との関係は今後検討しなければならない。村山・三浦（2015）の作成した公正世界信念尺度との関係では、道徳的不活性化は内在的公正世界信念とマイナスに相関することが見出された。Dark Triad 尺度との関係では、道徳的不活性化の「正当化の歪み」は、罪悪感や共感性に乏しく利己的かつ反社会的な行動をする傾向性を特徴とするサイコパシー傾向とプラスに相関することが示された。中尾（2015）は、サイコパシー傾向が共感を欠くがゆえに道徳性にも問題を抱えるようになるのではないかと予想しているが、本研究結果からはサイコパシー傾向と歪んだ道徳的正当化とは直接関係しているとも考えられる。このように 3 つの歪み尺度はそれらの下位尺度と仮説と一致した方向で有意に関連することが示された。これらの結果から、道徳的不活性化尺度の構成概念妥当性の一部が実証された。

(2) 今後の課題―基準関連妥当性と併存的妥当性―

本研究は道徳的不活性化尺度と道徳性と関連しそうなパーソナリティ要因との関連性を分析することで、尺度の構成概念妥当性を検討したが、今後は共感性、向社会性や道徳的基盤（Haidt, 2008）との関係を分析し、構成概念妥当性を確かなものにする必要がある。また、道徳的不活性化は具体的な状況の中で働く自己調整過程の部分的（選択的）な不活性化であるため、いじめ等のテーマに沿った不活性化の傾向を捉え、それと関連する行動との関連を分析することにより、基準関連妥当性も検討しなければならない。攻撃的行為、いじめ加害・傍観、あるいはネットいじめと道徳的不活性化の関係に関しては多くの研究が行われてきた。Killer, Bussey, Hawes, & Hunt（2019）は 7 歳から 19 歳の児童青年を対象にした 47 の論文、道徳的不活性化傾向といじめ関連行動との関連研究をメタ分析し、不活性化傾向といじめ加害（r=0.31; 95%信頼区間 CI [0.27, 0.34]）、およびいじめ防御行動（r=-0.11; 95%CI[-0.17, -0.04]）の間に有意な関係があると結論している。わが国においても、大西（2015c）は社会的認知の歪みといじめ加害について広範囲に渡る研究を行っている。これらの研究はいじめの予防と行動変容のエビデンスとなっている。また、Bussey, Fitzpatrick, & Ranan（2015）は道徳的不活性化が道徳的な知識の欠如を意味するのではないことをネットいじめに関する研究で明らかにしている。つまり、彼らは 11 歳から 15 歳の児童と青年を対象に、道徳的不活性化傾向とネットいじめ傾向との有意な関係が、ネットいじめに関する情報倫理知識の程度をコントロールしても維持されることを示した。今後、これらの研究を手がかりに、本研究の尺度の適用範囲を小学校高学年児童から中学生まで広げられるかを検討し、外的基準との関連性を分析することで尺度の応用性を高めていきたい。

社会的逸脱行為やいじめ加害の状況で働く社会的認知の歪みについて、道徳的不活性化以外にも多くの研究が存在する（吉澤, 2015）。Gibbs（2003）は攻撃性の高い人の攻撃行動が責任の外在化や結果の過小評価／誤ったラベリングなどの認知の歪みによって引き起こされると考え、そのような歪みの特徴を認知的歪曲として概念化した。その考えと関連して、吉澤・吉田（2004）は社会的逸脱場面に対する認知的歪曲尺度を作成し、大学生の認知的歪曲が彼らの逸脱行為への態度と逸脱行為の実行へと至る因果モデルを実証した。今後、本研究で作成された不活性化尺度と吉澤・吉田（2004）の認知的歪曲尺度との関連性を分析することで、併存的妥当性を検討することが必要である。

3. 今後の研究の方向

(1) 道徳的不活性化モデル、社会的領域理論、および社会的情報処理モデルの統合

Turiel（1983, 2002）の社会的領域理論において、道徳領域の核となる概念の「正義」を誘発する要素は「他者の苦痛」の認知である。他者の感情への感受性を高めることが道徳領域の活性化には必要となる。首藤・利根川・樟本・上岡（2020）は、小学生が対人的な攻撃行動に随伴する「他者に身体的・心理的苦痛を与えた」という道徳的逸脱の要素を重視し、それを善悪判断に利用することができるかを検討した。その結果、児童期の中期以降、被害を受ける他者の感情に敏感になるという道徳領域の基本的な要素が、非道徳的な要素の影響がある状況下でも適切な善悪判断と行為判断を導くことが示された。

また、社会的領域理論では、領域概念の調整という社会的認知のプロセスの結果、場面の道徳的要素を慣習的な要素として解釈する（例えば、体罰をしつけとみなす）ことにより、道徳的概念が判断や行動につながらないことがあると仮定する。凶悪犯罪の多い地区で生活する若者を対象にした研究（Posada & Wainryb, 2008）によると、ほとんどの青年が「生き延びる」ために盗みはするものの人への攻撃は加えないと考える一方で、「仕返しする」ためには人に危害を加えてもよいと考える者も少なくない。攻撃を受けた子どもは報復のための行為（攻撃）を「暴力」（道徳的逸脱）とは見なさず、自分の所属集団を維持する上で必要な行為（慣習領域）と考えるのかもしれない。さらに挑発する人物を「人ではない」と評価することで、道徳領域の思考が抑制されるのかもしれない。社会的領域理論では，このような領域調整の過程に仮説推論（informational assumption）」（Wainryb, 1993, 2006）という認知が媒介すると考える。「他人を殺める人は人間ではない」、「体罰はしつけである」、「報復は自民族の維持のために必要だ」という推論が仮説推論である。3 つの領域概念は文化に共通して認められるものの、仮説推論の根拠は曖昧であり、宗教、科学や教育の影響を受けるため、文化、時代による差異が大きい。その結果、社会的場面によっては、その解釈と判断、行動に文化差が認められる（Turiel, 2002）。

Kusumoto, Ueoka, Tonegawa, & Shuto（2018）は児童期と青年期の道徳的自律には、領域の特徴に合致した判断をする「領域対応型」、個人領域にも社会的規制が及ぶことを受容する「過剰抑制型」、道徳と慣習領域にも個人の自由意思を発揮する「自由感肥大型」の 3 つのタイプがあり、「自由感肥大型」の適応感が最も深刻であることを示した。「過剰抑制型」と「自由感肥大型」は、方向は異なるものの、どちらも社会的認知の歪みがあるタイプと考えられる。金綱・濱口（2019）は中学生を対象にして、報復的な攻撃行動が道徳領域ではなく慣習領域や個人領域から正当化された場合に許容されやすいことを見出した。この結果は、領域理論での歪んだ仮説推論や道徳的不活性化モデルでの「行為の再解釈」が、自己の道徳的概念を否定しない限り、受容されやすいことを示唆している。

Dodge（1986）による社会的情報処理モデルからも攻撃行動の生起と変容に関する多くの研究が生み出されてきた（例えば、濱口, 1992, 2002）。道徳的不活性化は情報処理ステップの「手がかりの解釈」と関係が深い。「解釈」から特定の行動を「検索」する仮定には個人要因である不活性化傾向や道徳的な領域調整が関わってくる。社会情報処理モデルと道徳に関する社会的領域理論と統合する試み（Arsenio & Lemerise, 2004）はいくつかなされているが、最近では、道徳的判断や社会的情報処理に感情要因を含めて検討されるようになった。Pozzoli, Gini, & Thronberg（2016）は、道徳的不活性化という自覚された道徳的認知と自覚しにくい道徳的感情の相互作用の結果としていじめ加害が生じることを報告した。Aquino, Reed II, Thau, & Freeman（2007）は、

アメリカ兵によるイラク兵拘束者への虐待に対するネガティブな情動を経験することで、大学生の道徳的不活性化傾向が低下することを報告している。Thornberg & Jungert（2013）は道徳的な感受性は道徳的不活性化と負の相関、不活性化傾向はいじめ加害・傍観とプラスの相関があり、道徳的感受性の低さは道徳的不活性化に媒介されていじめ加害・傍観に至るという因果モデルを検証している。

道徳的不活性化モデル、社会的領域理論、そして社会的情報処理モデルを統合することは長い道のりを覚悟しなければならない。不活性化モデルと情報処理モデルは行動面、領域理論は認知面を主に扱ってきたように、それぞれの理論・モデルには得意分野がある。今後は、どの理論・モデルに軸足を置くとしても、他の理論・モデルを意識した研究を進める必要があるだろう。

(2) 認知の歪みの発達と予防教育への適用

Bandura（2016）が「子どもは嘘やけんかを正当化することにより、罰から逃れることを学ぶ。責任を他の子に向けることで叱責を免れることを学ぶ。」（p.33）と指摘するように、子どもは歪んだ認知を獲得していくことは確かである。Camodeca & Taraschi （2015）は 3 歳から 6 歳の幼児の親の道徳的不活性化が子どもの外在化型の問題行動と有意に関連することを報告している。今後は、子どもの身近な大人の道徳的不活性化傾向が子どもの社会的認知と行動にどのように関連するのかについてデータを増やしていく必要がある。Bandura（2016）はアニメやビデオゲームには道徳的不活性化をもたらすさまざまな情報が埋め込まれており、それらが子どもの不活性化傾向の獲得に影響することを指摘した。Teng, Nie, Guo, Zhang, & Bushman（2019）は中国の 12 歳から 19 歳の青年を対象に、攻撃的なビデオゲームと攻撃性との関係を道徳的不活性化が媒介・調整することを示した。同様の結果は Yao, Zhou, Li, & Gao（2019）の研究からも示されている。ビデオゲームの影響に関して、幼児期や児童期初期の子どもを対象にした研究が待たれる。

道徳的不活性化といじめ加害・傍観との関係を示す研究はすべて学校での予防教育の基礎資料になる。西野・若本（2019）は小中学生対象の道徳的不活性化尺度（10 項目、3 件法、一因子）を作成し、中学生のいじめ傍観経験者は非経験者よりも不活性化得点が高いことを見出した。Chen, Zhao, & Deater-Deckard（2018）は中国の 15 歳の高校生を対象として、道徳的不活性化が内集団での攻撃性を調整する要因になることを報告した。Georgiou, Charalambous, & Stavrinides（2019）は 14 歳から 17 歳の青年の道徳的不活性化がマインドフルネスの実践により有意に低下し、いじめ加害を減少させることを見出した。Shukman, Cauffman, Piqero, & Fagan（2011）は非行少年の道徳的不活性化を低下させることが彼らの攻撃行動の減少につながることを報告した。

いじめを許容するような規範が学級で共有された場合、いじめ加害と傍観が生じやすくなることを示した研究もある（Kollerova, Soukup, & Gini, 2018; Menesini, Palladino, & Nocentini, 2015; 大西, 2007, 2010, 2015a; Thornberg, Wänström, & Pozzoli, 2017）。いじめを許容する集団規範は集合的道徳的不活性化と見なすことができよう。学級内で、あるいは仲間関係でどのように認知の歪みが共有され、集合的道徳的不活性化として発展するのかについて今後検討を加える必要がある。大西・黒川・吉田（2009）は、 児童･生徒による教師認知がいじめの加害傾向に影響を与えることを示したように、教師やリーダーとなる仲間の影響が大きいことが考えられる。

わが国においてはまだデータは多くないため、今後道徳的活性化と不活性化のメカニズム、およびそれらと関連する個人内要因と状況要因の研究が増えることを期待する。

引用文献

明田芳久(1992). 社会的認知理論・バンデューラ 日本道徳性心理学研究会編著 *道徳性心理学* (pp.221-247), 北大路書房

Aquino, K., Reed II, A., Thau, S., & Freeman, D. (2007). A grotesque and dark beauty: How moral identity and mechanisms of moral disengagement influence cognitive and emotional reactions to war. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 385-392.

Arsenio, W. F., & Lemerise, E. (2004). Aggression and moral development: Integrating social information processing and moral domain models. *Child Development*, 75, 987-1002.

Bandura. A. (1986). *Social foundation of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Bandura, A. (1989). Social cognitive theory of moral thought and action. In Kurtines, W. M. & Gewirtz, J. L. (Eds.), *Moral behavior and development: Advances in theory, research and applications* (pp.71-129). Hilsdale, NJ: LEA.

Bandura, A. (1992). Social cognitive theory of moral thought and action. In W. M. Kurtines & J. L. Gewirtz (Eds.), *Handbook of moral behavior and development: Theory, research and application* (Vol. 38, pp.69-164). Lincoln: University of Nebraska Press.

Bandura, A. (1999). Moral disengagement in the perpetration if inhumanities. Personality and Social *Psychology Review*, 3, 193-209.

Bandura, A. (2002). Selective Moral Disengagement in the Exercise of Moral Agency. *Journal of Moral Education*, 31(2), 101-119.

Bandura, A. (2016). *Moral disengagement: How people do harm and live themselves.* New York, NY: Worth publishers.

Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 364-374.

Bandura, A. McAlister, A., & Owen, S. (2006). Mechanisms of moral disengagement in support of military force: The impact of September 11. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 25, 141-166.

Bussey, K., & Bandura, A. (1999). Social cognitive theory of gender development and differentiation. *Psychological Review*, 106, 676-713.

Bussey, K., Fitzpatrick, S., & Ranan, A. (2015). The Role of Moral Disengagement and Self-Efficacy in Cyberbullying. *Journal of School Violence*, 14, 30–46.

Bussey, K., Quinn, C., & Dobson, J. (2015). The modeling role of empathic concern and perspective taking on the relationship between moral disengagement and aggression. *Merrill-Palmer Quarterly*, 61(1), 10-29.

Camodeca, M., & Taraschi, E. (2015). Like father, like son? The link between parents' moral disengagement and children's externalizing behaviors. *Merrill-Palmer Quarterly*, 61, 173-191.

Campaert, K., Nocentini, A., & Menesini, E. (2017). The efficacy of teachers' responses to incidents of bullying and victimization: The mediational role of moral disengagement for bullying. *Aggressive Behavior*, 43, 483-492.

Chen, G., Zhao, Q., Dishion, T., & Deater-Deckard, K. (2018). The association between peer network

centrality and aggression is moderated by moral disengagement. *Aggressive Behavior*, 44, 571-580.

Detert, J. R. (2008). Moral disengagement in ethical decision making: A study of antecedents and outcomes. *Journal of Applied Psychology*, 93(2), 374-391.

Dodge, K. A. (1986). A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota Symposium in Child Psychology* (Vol. 18, pp.77 - 125). Hillsdale, NJ: Erlbaum

Georgiou, S. N., Charalambous, K., & Stavrinides, P. (2019). Mindfulness, impulsivity, and moral disengagement as parameters of bullying and victimization at school. *Aggressive Behavior*, 46, 107-115.

Gibbs, J. C. (2003). *Moral development and reality: Beyond the theories of Kohlberg and Hoffman*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Gini, G., Pozzoli1, T., & Hymel, S. (2014). Moral Disengagement Among Children and Youth: A Meta‐Analytic Review of Links to Aggressive Behavior. *Aggressive Behavior,* 40, 56-68.

Haidt, J. (2008). Morality. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 65-72

濱口佳和(1992). 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 *教育心理学研究,* 40, 224-234.

濱口佳和(2002). 第 3 章 攻撃性と情報処理 山崎勝之・鳥井哲志(編) *攻撃性の行動科学ー発達･教育編ー*(pp.40-59). ナカニシヤ出版

平山るみ･楠見孝(2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響―証拠評価と結論生成課題を用いての検討― *教育心理学研究*, 52, 186-198.

稲垣勉 (2019). Dark Triad とシャーデンフロイデー特性妬みとの関連も踏まえてー *鹿児島大学教育学部研究紀要*, 70, 133-140.

Jackson, L. E., & Sparr, J. L. (2005). Introducing a new scale for the measurement of moral disengagement in peace and conflict research. *Conflict & communication online*, 4(2), 1-16.

金綱祐香･濱口佳和(2019). 攻撃行動に対する中学生の善悪判断と判断に影響を与える要因の検討 *教育心理学研究*, 67, 87-102.

Killer, B., Bussey, K., Hawes, D., & Hunt, C. (2019). A meta-analysis of the relationship between moral disengagement and bullying riles in youth. *Aggressive Behavior*, 45, 450-462.

Kollerova, L., Soukup, O., & Gini, G. (2018). Classroom collective moral disengagement scale: Validation in Czech adolescents. *European Journal of Developmental Psychology*, 15(2), 184-191.

Kusumoto, C., Ueoka, K., Tonegawa, T., & Shuto, T. (2018). Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy. *岡山県立大学保健福祉学部紀要*, 25(1), 49-64.

Lerner, M. J. (1980). *The belief in a just world: A fundamental delusion*. New York: Plenum Press

Menesini, E., Palladino, B. E., & Nocentini, A. (2015). Emotions of moral disengagement, class norms, and bullying in adolescence: A multilevel approach. *Merrill-Palmer Quarterly*, 61, 124-143.

溝川藍・子安増生(2020). 国際経験と批判的思考態度が法・道徳意識に及ぼす影響 *心理学研究*, 90, 562-571.

村山綾・三浦麻子(2015). 被害者非難と加害者の非人間化―2 種類の公正世界信念との関連― 心

理学研究, 86, 1-9.
中尾央(2015). 共感・共感的配慮と道徳性 *心理学評論*, 58, 236-248.
西野泰代・若本純子(2019). 小中学生におけるいじめとモラルディスエンゲージメントとの関連(1)―いじめ場面での防寒行動とモラルディスエンゲージメント― *日本発達心理学会第 30 回大会発表論文集*, 213.
大西彩子(2007). 中学生のいじめに対する学級規範が加害傾向に及ぼす効果 *カウンセリング研究*, 40, 199-207.
大西彩子(2010). いじめの個人内生起メカニズム―集団規範の影響に着目して― *実験社会心理学研究*, 49,(2), 111-121.
大西彩子(2015a). *いじめ加害者の心理学 －学級でいじめが起こるメカニズムの研究－* ナカニシヤ出版
大西彩子(2015b). 認知のゆがみを説明する理論(包括的レビュー). 吉澤寛之・大西彩子・G　ジニ・吉田俊和編著. *ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動 －その予防と改善の可能性－*(pp.21-38) 北大路書房
大西彩子(2015c). 認知のゆがみといじめ. 吉澤寛之・大西彩子・G　ジニ・吉田俊和編著. *ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動 －その予防と改善の可能性－*(pp.99-111) 北大路書房
大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和(2009). 児童･生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす効果 －学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して－ *教育心理学研究*, 57, 324-335.
Pacielo, M., Fida, R., Tramontano, C., Lupinetti, C., & Caprara. G. V. (2008). Stability and change of moral disengagement and its impact on aggression and violence in late adolescence. *Child Development*, 79, 1288-1309.
Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The dark triad of personality: Narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36, 556–563.
Pelton, J., Gound, M., & Forehand, R. (2004). The moral disengagement scale: Extension with an American minority sample. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 26(1), 31-39.
Posada, R. and Wainryb, C. (2008). Moral development in a violent society: Colombian children's judgments in the context of survival and revenge. *Child Development*, 79, 882- 898.
Pozzoli, T., Gini, G., & Thronberg, R. (2016). Bullying and defending behavior: The role of explicit and implicit moral cognition. *Journal of School Psychology*, 59, 67-81.
Shukman, E. P., Cauffman, E., Piqero, A. R., & Fagan, J. (2011). Moral disengagement among serious juvenile offenders: A longitudinal study of the relations between morally disengaged attitudes and offending. *Developmental Psychology*, 47, 1619-1632.
首藤敏元(2013). 道徳性　藤永保監修　内田伸子・繁枡算男・杉山憲司責任編集. *最新心理学事典*(pp.558-559), 平凡社
首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美(2020). 小学生における対人的攻撃場面での社会道徳的領域調整の発達　*埼玉大学紀要教育学部*, 68(2), 21-31.
田村紋女・小塩真司・田中圭介・増井啓太・ジョナソン ピーター カール(2015). 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み　*パーソナリティ研究*, 24, 26-37.
田村 達・大渕憲一(2006). 非人間的ラベリングが攻撃行動に及ぼす効果－格闘ＴＶゲームを用い

た実験的検討－ *社会心理学研究*, 22, 165-171.

Teng, Z., Nie, Q., Guo, C., Zhang, Q., & Bushman, B. J. (2019). A longitudinal study of link between exposure to violent video games and aggression in Chinese adolescents: The mediating role of moral disengagement. *Developmental Psychology*, 55, 184-195.

Thornberg, R. & Jungert, T. (2013). Bystander behavior in bullying situations: Basic moral sensitivity, moral disengagement and defender self-efficacy. *Journal of Adolescence*, 36, 475-483.

Thornberg, R. & Jungert, T. (2014). School Bullying and the Mechanisms of Moral Disengagement. *Aggressive Behavior*, 40, 99-108.

Thornberg, R., Wänström, R., & Pozzoli, T. (2017). Peer victimization and its relation to class relational climate and class moral disengagement among school children. *Educational Psychology*, 37, 524–536.

登張真稲・首藤敏元・大山智子・名尾典子(2019). 3 因子で捉える多面的協調性尺度の作成 *心理学研究*, 90, 167-177.

Traclet, A., Moret, O., Ohl, F., & Clémence, A. (2015). Moral disengagement in the legitimation and realization of aggressive behavior in soccer and ice hockey. *Aggressive Behavior*, 41, 123-133.

Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge, England: Cambridge University Press.

Turiel, E. (2002). *The culture of morality: Social development, context, and conflict*. Cambridge, England: Cambridge university press.

Visconti, K. J., Ladd, G. W., & Kochenderfer-Ladd, B. (2015). The role of moral disengagement in the associations between children's social goals and aggression. *Merrill-Palmer Quarterly*, 61, 101-123.

Wainryb, C. (1993). The application of moral judgments to other cultures: Relativism and universality. *Child Development*, 64, 924-933.

Wainryb, C. (2006). Moral development in culture: Diversity, tolerance, and justice. In M. Killen & J. G. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*, (pp.211-240), Mashwah, NJ: Erlbaum.

Waytz, A., & Epley, N. (2012). Social connection enables dehumanization. *Journal of Experimental Social Psychology*, 48, 70-76.

Yao, M., Zhou, Y., Li, J., & Gao, X. (2019). Violent video games exposure and aggression: The role of moral disengagement, anger, hostility, and sidinhibition. *Aggressive Behavior*, 45, 662-670.

Yeates, K. O., & Selman, R. L. (1989). Social competence in the schools: Toward an integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, 9, 64 -100.

吉澤寛之(2015). 認知のゆがみの測定方法. 吉澤寛之・大西彩子・G ジニ・吉田俊和編著. *ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動 －その予防と改善の可能性－*(pp.55-73) 北大路書房

吉澤寛之・吉田俊和(2004). 社会的ルールの知識構造から予測される社会的逸脱行為傾向－知識構造測定法の簡易版と認知的歪みによる媒介過程の検討－ *社会心理学研究*, 20, 106-123.

脚注

(1) disengagement の辞書的な意味は「（連結・束縛からの）解放、自由、撤退」である。道徳性研究の文脈では、人は道徳的な自己規制（基準）を破るのではなく、それから disengage すること、つまり「撤退する」あるいは「解放される」ことで、罪悪感なしに非道徳的な行為をとることができ、自尊心や道徳的な統合性の感覚も保つことができるという意味で用いられている。そのため、本論文では、moral disengagement を「道徳的不活性化」と訳している。これは大西（2015b）も採用した訳語である。

付記

本研究の一部は JSPS 科研費 JP17H02629 の助成を受けた。本研究の実施にあたり、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げる次第である。

（2021年3月31日提出）
（2021年5月10日受理）

Moral Cognitive Distortion for Young Adult Japanese:
Development of the Scale of Moral Disengagement

SHUTO, Toshimoto
Saitama University, Faculty of Education
TONEGAWA, Tomoko
Tohoku Fukushi University, Faculty of Education
KUSUMOTO, Chisato
Okayama Prefectural University, Faculty of Health and Welfare Science

Abstract

The theory of moral development should explain prosocial behaviors and cooperation in diverse societies and the process of conducting inhumane behaviors. Recent research has focused on cognitive distortions that prevent moral concepts from functioning during violent incidents and cyberbullying. Studies on the effects and changes in moral disengagement were mainly conducted in Europe and the US, whereas these studies have just begun in Japan. As a result, it is necessary to develop scales for assessing cognitive tendencies for moral disengagement. This study developed a scale to assess cognitive distortion in moral settings. Participants were Japanese youth （*N*=1,082, age *range* 15-22 years）. In Study 1, we conducted exploratory research with university students by preparing 17 items related to children's perception of bullying. The results indicated a two-factor structure in the disengagement tendency. However, the two-factor structure had inadequate goodness of fit. In Study 2, we expanded the study to high school students, university students, and working adults aged between 18 and 22 years. We used item analysis and factor analysis and developed a moral disengagement scale consisting of nine items and three factors: "Distortion of justification," "Interpretation," and "Evaluation." Then, we confirmed the goodness of fit of the scale's factor structure, assessed its reliability using the test-retest method, and established the three subscales' internal consistency. An analysis of variance indicated that the three types of distortion scores were significantly higher in men than women, significant in high school and university students. Moreover, we analyzed the correlation of the new scale with the Dark Triad, Multifaceted Cooperativeness Scale, Belief in Just World Scale and Critical Thinking Dispositions Inventory, which indicated that the three distortion subscales were partially but significantly correlated with those subscales, demonstrating some of the construct validity of the scale of moral disengagement for youth. In the future, the scale's criterion-related validity and the possibility of using the scale with elementary and junior high school students should be examined.

Keywords：cognitive distortion, moral disengagement, young adult, scale development